

他者との対話を通して生成される文化のナラティブ

—文化・メディア・教育を通じた日常的行為へのアプローチ—

Narrative of culture generated through dialogues with other

—Approaches to the daily act through culture / the media / the education—

研究代表者 木戸 彩恵 (D1)

教員 やまだ ようこ

研究分担者 家島 明彦 (D3)

黒田 真由美 (D3)

平川 祥子 (D2)

東畑 開人 (D2)

〔研究目的〕

我々をとりまく日常的行為の文化的文脈は、通常意識化されておらず、自らが在る文化圏から離れて違和感を覚えることによって、はじめて日常的行為に対する自分なりの意味づけが意識的・先鋭的に違和感として眼前に立ち現われてくる。

このような違和感は、身近な他者との対話を通じた日々の行為が文化を生成しており、その文脈が、それぞれの文化において独自性を有していることに関わっている。そして、人が異なる文脈に身を置くときには、日常的行為の文化的独自性はアイデンティティ・ポリティクスのような文化間軋轢としてしばしば顕在化する。それぞれの文化的文脈における日常的な行為をありのままに理解するためには、個人の体験に纏わるマスター・ナラティブとその変容を、多様な文脈・視点から問い直す必要がある。

そこで、本コロキウムでは装い(化粧・美)・メディア(雑誌掲載広告)・娯楽(漫画)・教育(小学校の授業)といった日常的行為によって生成される文化に対して異なる文脈から多角的に検討する。装い・メディア・娯楽・教育は、いずれもが日常的に切り離すことができない行為であるがゆえに、複雑な構造を持っている。その性質は可変的であり、時代背景、所属する集団、文化によってとらえられ方や意味合いは多様である。行為主体である人の微細な文化化について考えること、個人のもつ文化の意味を考えていくことが文化を捉える際に重要なこととなり(矢吹, 2004)、研究者は、そのダイナミズムについて精緻な検討をしていく必要がある。そのため、方法論としては、フィールドに密着した研究方法であるナラティブ・アプローチを採用したい。ナラティブ・ターンを機にナラティブ・アプローチは、多くの方法論が開発され実際の研究に使用されるこ

ととなった。

特に、ナラティブ・アプローチの中でも、対話的關係性の中で人々が日常的行為をいかに意味づけているのか、そのダイナミズムを臨床と発達という近接する領域から、相互の視点を通して領域横断的に検討する。そして、日常の文脈に埋め込まれた文化的行為が個人にとってどのような意味を有しているか、その微細な変容がいかに心理的に影響するか明らかにする。その上で、黒田（2005, 2006, 印刷中）が教室内での談話分析を通じた教育へのサポート的介入を行っているように、ある行為に軋轢が生じた場合の支援の可能性について考察する。本コロキウムでは、対話の対象を人のみに限定せず、平川は雑誌、家島は漫画というように、様々な媒体を研究対象に含める。また、現段階においては、ナラティブ・アプローチに関する方法論の扱いの多くが、研究者個人の判断に委ねられている。

〔研究経過〕

そのため、本コロキウムでは、①基礎研究としてナラティブ・アプローチにおける対話理論にまつわる文献の読書会をおこなった。具体的には、バフチンの理論がいかに実践的研究に結び付くか、実践的な研究をとおして学ぶことを目的として質的心理学研究（2008）の特集を精査した。その上で、対話理論に用いられている概念についての確認及び共通理解が必須であることを認識し、バフチンの代表作の一つである「小説の言葉」を読むこととした。基礎研究をとおして、それぞれが対話理論に関する基礎研究をふまえた上で、②応用研究として、実際にコロキウム参加者がおこなった研究を通して方法論の実用性を議論した。③さらに発展的に、新たなアプローチ法として、特に近年その役割が大きく注目されているヴィジュアル・ナラティブの可能性を高橋正実氏（ノースイースタン・イリノイ大学 Associate Professor）をお招きし、ワークショップでの実践を通してその力を体感した。

〔研究成果〕

本コロキウムを通じて、我々は実に様々な対話を取り扱ってきた。特筆すべき研究成果としては、バフチン特集を学んだことにより我々の対話に関する認識が豊かなものに変化したことにあると考えられた。実践研究の発表と対話概念を組み合わせることで得られる、将来の研究の可能性は本コロキウムに参加したメンバー全員に共有された。本コロキウムでの学びを未来につなげるべく、我々は研究対象と学術的知見の間で絶えず対話を繰り広げていく所存である。